

● まえがき

➤ フットパスとは何か

必ず最初に「フットパスとは何か」と聞かれる。

町田市やマスコミの間では

「森林や古い町並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くことができる小道」

という定義が定着してきた。

イギリスの湖水地方の美しい景色の中、

緑の小道を三々五々リュックをしょった人々が歩く姿を思い描いていただきたい。

これがフットパスのイメージである。

自然の中を五感で楽しみながら歩く発見と癒しのウォークである。

他のウォークとの大きな違いは、フットパス・ウォークは自分の健康や楽しみのためだけでなく、歩く地域にも多くの波及効果を及ぼして活性化をもたらすことができることである。また都市部と農村部、地域と地域を繋ぐ力があり、日本に新しいネットワークを立て直す力があると考えられている。イギリスではあるロングトレイル（長いフットパス）では年間 30 億円という経済効果も出ている。行き詰っている日本を立て直す起爆剤や潤滑油として今熱い視線が注がれているのである。

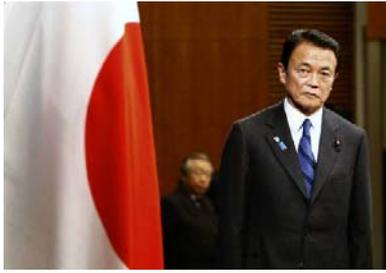


湖水地方の風景 (forums.myspace.com/t/3647576.aspx?fuseaction=...から使用)

➤ 不安ばかりの日本

今の日本は不安ばかりである。中国餃子に始まる食の安全、低い自給率、職もなく荒れる若い人と行き場のない後期高齢者、勝組と負組の二分化社会、取り残された 7900 もの限界集落と荒れた自然、取り残される日本外交。

高度成長期を経て“お金”だけを追求してきた資本主義経済の様々な問題点が表面化した時代になった。このままでは日本は物心ともに崩壊してしまうのであろうか。



麻生首相と派遣村

business.nikkeibp.co.jp/.../20081212/180112/ www.shimotsuke.co.jp/.../news/20090105/95116

今や低成長でも人間の生きる速度に合った、地に足のついた経済社会の再建が望まれる。まず、食の安全の問題である。食の安全をつきつめていくと、自分の目で確かめることができる安全な農業に都市住民が参加することが一番の方法であるし、今の社会状況では都市住民が多かれ少なかれ農業に携わらなければならない日が来るのも遠くないであろう。これによって自給率が高められ、地方と連携を強くしてパイ自身を大きくすることができるならば、国の底力を蓄え、有事の際にも余裕を持って行動できる国になるであろう。

次は限界集落など地方の活性化の問題である。地方を魅力ある地域にすることによって都市住民や若い人にも日本のすみずみの地域で生活の場が与えられ、これによって勝ち負けではない優しい社会が実現するのではないか。さらにこれらの新住民が首都圏まで出向かずに満足のいく生活をするために、質の良い商業施設や大中小企業がこれらの地域の近くにある中小都市に発達し、環境に適応する新都市型の商業再開発もできるのではないだろうか。こうすれば、秀でた環境に接しながら都市のライフスタイルも得ることができて、こんなハイセンスのまちならば、人材も情報も資金も集まり、医者も来るだろう。

中国やインドの進出を怖れたりうらやむことはない。

本当の先進国になろう、人真似でない自分らしい国になろう。日本は今こそ成熟社会になることが望まれている。

➤ 解決への糸口-フットパス

しかし八方ふさがりの日本。どこから手をつければいいのか。こんがらってしまった玉でも糸口を見つければスルスと 1 本の糸に収斂できる。この糸口として私たちが 15 年の活動を通して発見したのが「フットパス」である。

フットパスの発祥地イギリスでは、どんなまちでも内外にフットパスが整備されていて、市民が歩くのを楽しんでいる。約 100 年前、産業革命で疲労した労働者が、貴族に囲い込まれてしまった国土をせめて歩かせてほしいと人間としての要求を求めた運動の結果勝ち得た権利で、イギリス全土に小道網が整備されている。牧場や緑地など私有地の一部を市民が通行できるようになっていて、全国のフットパスを紹介したマップが整っており、イギリス中を隅々まで歩けるようになっている。世界中からツーリストが訪れ、観光立国イギリスを築いている。ピーターラビットゆかりの湖水地方やコッツウォルズのフットパス



コッツウォルズのチップンカムデン

は日本でも有名であろう。

今日本では北海道や東北、関東、東海、関西など全国で、このフットパスに希望を見出す地域が増えている。首都圏では環境保全の観点から、また過疎化に悩む地方からは行き詰った観光や郷土再発見のまちづくりに対して光明を与える策としておおいに期待されている。

➤ フットパスの活性化

なあーんだ、エコツーリズムか。そんなのもうどこでもやっているし、あまり成功していないよ。という声が聞こえるようである。今や地域を歩くイベントは陳腐化しており、まちづくりへの効用もそれほどあがってはいないようである。

しかしフットパスは特別なのである。

私たちは過去 15 年間多摩丘陵でフットパス・ウォークを主催してきたが、多くの人を引き寄せ、リピーターを作り、地元の意識をも変革させ、まちづくりを推進する力になることを目の当たりにしてきた。フットパスの先進自治体の 1 つである甲州市の担当者三森氏はフットパスには、理性ではなく感性に訴え、ひとを惹きつけてやまない不思議な「魔力」があると言う。甲州市ばかりでなく、フットパスの恩恵を受けた自治体の担当者はそのまちづくりへの「魔力」を実感しており、次第に全国にフットパスによるまちづくりが浸透しつつある。

フットパスがまちづくりへ効果を発するにはいくつかのノウハウがある。そのノウハウさえクリアすればどんな地域においてもフットパスはまちづくりを成功させる公式になることができる。そのノウハウをお伝えしようと町田市、長井市、甲州市、北海道の黒松内町などのフットパス自治体は今年 2 月に「日本フットパス協会」を設立し、希望の自治体



2007年11月「日本フットパス協会」設立発起人準備会



2008年11月 設立打合せ

やNPOにフットパスをきっかけとするまちづくりを広めていく計画である。

フットパスの公式を当てはめると、近隣や首都圏の都市から、都市住民が地方に通うようになり、地元と一緒に農業を再生し、地産地消による安全な食物供給と気持ちよく居住できる近隣都市空間の整備、そして産業の活性化を伴ったまちづくりができるのである。

フットパスの観点からすれば限界集落には資源はいっぱいある。

フットパスの最も大事なノウハウの1つは、景観が大事ということである。良い景観を繋いだコースには多くの人が何度も訪れる。限界集落には里山など日本の従来の素晴らしい景観が残る地域が多くあり、伝統農業も残っている。緑や景観、伝統農業という資源を活かしたまちづくりができれば、生物多様な環境と地域経済がかみ合った持続可能な社会が日本全国に構築されることになろう。明るく豊かな日本の将来を子供達に残そう、これが「日本フットパス協会」に託された願いなのである。

●本論

○活性化したまち、小野路

私たちのフィールドである町田市の小野路は、多摩丘陵の中でもとりわけよく里山の景観と生活が残る地域である。新宿都心から小田急線で3~40分、鶴川駅下車、幹線道路鎌倉街道を一步入るとそこには幕末から変わらない多摩丘陵の景観がしっぼりと残っている。めぼしい名所や史跡などほとんどない、田舎の風景だけが広がる里である。しかし、ここを一度訪れた人はその景観の虜になり、自分だけの心のふるさととして春夏秋冬何度もリピートして訪れるようになる凄い魔力を持った地域なのである。



ここはもともと区画整理が計画されていた。しかし町田市が180度政策を転換して「農と緑のふるさと」とすることに決定し、多摩丘陵の中で最も大きい緑が残ることとなった。10年ほど続けてきたフットパス活動が功を奏したのである。

私達はこの地域を中心に多摩丘陵のフットパスをご案内してきた。多摩丘陵はいくつも小さな丘陵や谷戸（やと）が折り重なって景観を作っている。私は小野路の別所の大犬久保（おいなくぼ）の明るい谷戸が好きなのだが、多摩丘陵のそれぞれの谷戸が異なった趣



布田道と大犬久保との分かれ道



大犬久保の谷戸

きを持っていて美しい。景観ばかりでなく、古代から谷戸や雑木林で営まれてきた人々の生活や鎌倉時代や幕末のままの古道に漂う歴史上の人物の面影が等身大に感じられて、こ

ういうところを失えば、私たち、日本人ばかりでなく、人類のふるさとや存在理由までがなくなってしまうように思われた。

そこでこの里山を残そうと自分達で選び抜いたお気に入りの道や心にせまる景色を皆さんに見ていただきたいと思った。いくつかのコースを繋いで整備し、道標を立て、散策マップを作ってフットパス・ウォークを主催した。今は地域の発見ツアーなどは陳腐化して珍しくもないが、当時は自分の地域を歩いて見直すことの素晴らしさは新鮮で大変な人気となった。

特に毎年春秋恒例の“フットパスまつり”は公募をかけると数日でいっぱいになる人気イベントである。100人の参加者を募って小野路のフットパスを案内している。幕末のよす



フットパスまつり

がを残す小野路の景観に浸りながら、歴史・古街道の専門家の解説によって郷土を見直し、フットパス・ウォークでなくては得られない新たな発見を楽しんでいただく。そして昼食には地元の方に郷土で昔から伝えられてきた行事食を作っていただき暖かいおもてなしを堪能していただいている。多摩地方の祝儀にも不祝儀にも必ず出される行事食は赤飯（不祝儀のときには“施鬼飯”と書く）とけんちん汁である。祝儀の時には地とれた金ゴマをそのままかけ、不祝儀のときにはすりつぶしてかける。惣菜は切り干し大根に芋茎（ずいき）の煮物。最後に地粉のうどんがもてなされる。金ゴマや小麦粉などほとんど地元のもので、赤飯にかける塩などにいたっては天塩を藁でくるんで炭焼き釜で炭と共に1週間焼いた塊をトンカチでたたき石臼でひいたサラサラの甘い塩を使う。都市生活では手間がかかってできない心のこもった食事である。保険料、講師料、食費として参加費1000



地粉のうどん



おもてなしの準備

円をいただいているが、この食事を目当てに毎回いらっしゃる参加者もあるほど評判のお昼である。

誰も最初はこんなに小野路が有名になるなど思いもしなかった。しかし一旦有名になると情報や資金そして人材すべてがここに集まってくる。町田市は国からの補助金も取り込んで小野路の環境整備に取り掛かっている。NHKや各新聞などマスコミからは頻繁に取材が入る。NHKで09年1月放送予定の白洲次郎物語に関連して、小野路のどうづき歌や糸巻き歌が発見された。小野路を舞台とした廃能「横山」も発見された。町田で唯一の蚕農家が小野路にあることもわかった。新撰組資料館として唯一小野路で有名だった小島資料館もカビくさい博物館ではなく近藤勇や土方歳三の息遣いや笑い声が伝わるようである。次第に多くの人々がまちづくりに巻き込まれていく。地元の人々の手によって宿場であった小野路宿が再現されようとしており、元名主館「角屋」がそのまちづくりの拠点として命を与えられようとしている。

私達はこの5年間に小野路の大きな変化を目の当たりにした。

○ 活性化とは何か---地域の意識変革

➤ 生まれる地元の誇りとまちづくりへの意識変革

歩く側だけでなく歩かれる側の地元で予想以上の大きな活性化をもたらす、これが私たちが経験したフットパスの最大の効果である。都市住民が小野路の里山を歩くようになった結果、多くの人にその素晴らしさを讃えられるようになって、地元の人々がご自分達の地域の価値に気づかれ、誇りに感じていただけるようになったのである。「ここを見て気に入ってしまったという人がいっぱいくるんだよね。お茶でも飲んでいきなよといって、その日に薪で煮ていた芋や餅など食べさせてあげると、ここは私の心のふるさとだと言って何度も来て声をかけてくれるようになるんだよ。その人たちが皆でいい、いいと言ってくると、前は当たり前だと思っていたけれど本当はずいぶんいいところに住んでいたんだと思うようになってね。でも、お父さんは何があっても頑固にずっと自分の田んぼや畑をやってきたけど最近やっぱりお父さんが正しかったんだと思うようになったよ。」と地元の農家の小林さんは言う。



都市住民にとっては里山で魅力的なもののは景色ばかりではない。安全な食という意味で近隣の里山の食べ物—信用のある農家の作った野菜、農家が自分の畑でとった大豆で作る味噌、農家の庭先の無農薬のゴマなど—は安全で信頼のおける究極の食である。一方、

農家のお母さん達からすれば、都市住民が来るようになってから味噌、梅干、金ゴマ、そして庭先の野菜など、台所の奥に眠っていた食材を出してみたら数千円から数万円、が売れ、自分達の生活では価値のなかったものに大きな付加価値がついたということで大変に



小野路の金ゴマ



地粉の饅頭

喜ばれ、その活気はお父さん達までも巻き込んでいった。「小野路宿まちづくり協議会」で小野路宿の宿場の復元や、元名主屋敷「角屋」の拠点化など環境を活かした計画が進んでいる。都道の拡幅工事を機会に宿通りの両側に水路を残しながら、黒塀を回し、門前にはそれぞれの屋号を出すなど、往時の様子が再現されることになっている。また小野路宿の玄関口にあたる元名主屋敷「角屋」を町田市が買い取って改築し、特産物の販売やおもてなしの場、そして小野路住民の活性化の拠点として幅広く利用されることになっている。さらに今年は都市住民を募集し、地元の農家の方々を講師としてその方々の遊休地で野菜作りを指導していただく「農業塾」プロジェクトを計画している。観光面だけでなく、地元を支える産業を育て、底力のある地域を構築していくコンセンサスが小野路に作れつつある。



元名主屋敷「角屋」門



内部



三層の蔵

➤ 活性化のメカニズム

「多摩丘陵フットパスまつり」を毎年開催するようになって、こんな小さなイベントなんかと思っていたが驚いたことに1~2年で小野路の地元の方々の意識は目に見えて変わり始めた。フットパスの活動をきっかけに地元の方々に里山の価値や重要性がわかっていただくことができたのである。いつの間にか私達が唱えていたことが地元の方々の口に乘っ

て唱えられるようになったことには驚くとともに心から感激した。区画整理に係わる開発を経験して地主さんたちとの気持ちの隔たりの大きさを痛感していた私達にとってこれは驚きだった。さらにそれだけではなく、地元住民と新住民の間に強い信頼と交流が生まれ、双方に地元への愛情が生まれ、ひいてはお互いに協働して地元を保全し発展させていこうというまちづくりへの活気が生まれたのである。

地域の活性化が叫ばれて久しいが、真の活性化とは何か、活性化を起こすメカニズムとは何なのか、いまだ普遍的な答えがない。活性化とは博覧会とかテーマパークとか箱物をつくることではない。自治体に資金を配っても活性化は起こらない。活性化とは、これまでのように企業が進出して雇用が拡大することでもないと思う。

活性化とは、地元の人々がやる気になることなのではないだろうか。やる気にさえなればどんなことでも案外到達できるのである。落とされるお金は少なくとも地元でやる気が起きさえすれば活性化は始まるのである。お金より意識が大事なのである。お金は後からついてくる。私は小野路で活性化のメカニズムを目の当たりにした。そして活性化を常に新鮮に保つのがフットパスなのである。

➤ フットパスの魔力

何故たかだかウォーキングにしかすぎないフットパスにこんなにも期待できるのか。それはフットパスが楽しいからにほかならないからであって、その楽しさが人から人へ伝染するからである。その楽しさは心の底から湧き出る知的な喜びである。ちょうどコンピュータゲームの持つ面白さとは真正面から対峙する高度なレクリエーションなのである。最初は半信半疑であっても一旦はまったら熱病にかかったようにフットパスの素晴らしさが語り継がれ、伝染していく。

甲州市の政策秘書課の中村さんは「最初はただ歩くだけと聞いていたので何が楽しいかわからなかった。でも、皆でコース作りにあちこち歩いているうちにいいところがあるなあとすっかりはまってしまった。マップを作るのも楽しかったが、イベントのときに勝沼駅でお客さんたちが皆そのマップを広げてコースを勉強しているのは壮観で、嬉しかった。またイベント会場の大澤の部落では山間の村にこんなにも多くのお客さんが来てくれたと大変感激して、11月30日のフットパスでは村人皆が自分の家の縁側を開放してカフェやギャラリーにしてくれることになった。フットパスはあちこちで感動が繋がる素晴らしいものだ」と熱っぽく語ってくださった。

勝沼町でフットパスを成功させている立役者の観光課三森さんは「今まではなかなか統合の図れなかった地元、市民、行政の人たちが、皆巻き込まれ、気持ちを一つにして同じ方向と一緒に活動し始めたのは本当に凄いことだ。フットパスには魅力ならぬ魔力がある。」という。自ら勝沼フットパスの案内役を精力的に活動されている。

➤ 行政とNPOのペアで

勝沼は、昔から、日本で先駆的に本場ワインを作り始めたり、新宿に公営レストラン『カーヴ ドゥ カツヌマ』というしゃれたお店を持っていたり、勝沼ぶどう郷に道の駅など



勝沼フットパス



大日影トンネルコース

目ではないゴージャスな公営企業ぶどうの丘を経営したり、と勝沼のセンスのよさは並ではない。本来ならばぶどうと観光で十分潤っているはずの勝沼だが、三森さんが懸念しておられるのは、この数年間ぶどうの価格が据え置きになっていて収入の先細りが案じられるのだそうだ。そこで何かいい手段を探しておられるときに目を付けたのがフットパスだったということであった。

そして行政の三森さんをしっかりと支援しているのが「勝沼朝市の会」を早くから立ちあげてきたNPOの高安さんである。高安さんは地元の農家と新住民を朝市という形で試行錯誤しながら繋ぎ、まちづくりを行政を率いるように先頭をきって活動してきた。センスのいいまちには必ずそれを支える層の厚い市民や市民団体が育っている。三森さんを初め勝沼の皆さんは小野路のフットパスにも視察に来てくださった。フットパスに目を付けたというのもセンスの高さを物語っている。勝沼はフットパスの目で見ると資源の宝庫だ。

山形県長井市も元気なセンスの高いまちである。フットパスは国交省がらみの「最上川フットパス」の構想に伴って整備されたものだが、その前から長井市はごみと農業の地域循環事業であるレインボープランや、フラワー線が映画「スイング・ガールズ」の撮影に使われるなど、次々と新しい試みを行っている知る人ぞ知る自治体である。当時フットパス担当だった浅野さんは2005年の1月正月もまだ開けやらぬときに突然電話を下さって、次の日にはもう小野路を見にこられた。そして3月のフットパスまつりには数十人の方々をひきつけて視察にきてくださった。このエネルギーはやはりただの地方都市ではない。2006年には全国に向けて初めてのフットパス・シンポジウムを行った。パネラーをもてなしてくださった前夜祭には市長を初め、商工会議所、行政、NPO、そして国交省の担当の方々が迎えてくださって、まち全員がおもてなしをしてくださっている意気込みには相



長井市長主催シンポジウム前夜祭



「全国フットパスシンポジウム in ながい」



最上川フットパス



青木さんと長井の町並み

当なものがあった。長井にもフットパスを支えるいくつかのNPOがしっかり育っていて、長井まちづくりNPOセンター事務局長の青木さんは名古屋やアメリカ留学でNPO活動ノウハウをしっかりと得た若手ホープであるし、ながいフットパス推進会議議長の菅野さんも青年会議所理事長などを経験する若い実業家である。

黒松内町はフットパス王国北海道の代表のようなまちである。北海道自体は全道フットパス大会などもあるほどであり、フットパスが観光やまちづくりの目玉となっている。サミットが行われた洞爺湖にも近いこの小さな町でサミットと同年 8 月にイギリスのウォーキング団体ランブラーズ協会の担当者を迎えて国際フットパス・シンポジウムが行われた。シンポジウムが行われた当日の午前中に黒松内フットパスボランティアという市民団体が開拓した熱帯川沿いのチョコシナイコース 12Kmを歩いた。イギリスなみの長距離コースを草刈し、コースを整備し、かなりの雨の中でもものともせず歩きとおすエネルギーには



「国際フットパスシンポジウム in 黒松内」



全道フットパス自治体が集合した後夜祭



イギリスのような黒松内のフットパスと風景：チョボシナイ・コース

黒松内全町をあげての取り組みの情熱を感じた。シンポジウムの後の交流会では、黒松内だけでなく、近隣のニセコ、南幌、白老、などなど多くのまちが集まり、ご自分たちのフットパスを自慢をしておられ、フットパスが深く浸透していることがわかった。

このようにフットパス自治体の共通点として、行政を支えるNPOや市民による受け皿がしっかりできあがっているという特徴がある。NPOがあれば行政の担当者が変わっても、元担当者はNPOにうつって活動を続けることができ、ノウハウも構築される。

準備会の3市1町は、フットパスに対しても浮ついて飛びついたわけではなく、フットパスの真髓をよく理解した上で、地元の勢いを取り込み、着実に成果を上げてきたまちなのである。

➤ 深まる自治体間の交流

自治体の内部ばかりでなく自治体同士の交流においてもフットパスが係わると一味違ってくる。フットパス協会設立準備会の打ち合わせや小野路への視察などでときどき各地にフットパスの担当者の方々などが町田を訪問される。大中小入り混じったこれまで全く関係のなかった自治体の職員同士が顔を見合わせてお互いのまちを知り、将来の夢を語っていくうちに、次第に長年の知己であるように感じられてきて、いつも和気藹々と大声で熱のこもった議論となる。これこそがフットパスの提供してくれる楽しさである。他の交流もないわけであろうが、どういうわけかフットパスに係わると、間違いなくこの職員やNPOの方たち、そして自治体同士は、本当に親しくなっていくのである。またその楽しさをご自分のまちに持ち帰って地元でのまちづくりに対して楽しく積極的に関与していくようになるのを見てきた。その後、お互いのまちの人々が集団で友達関係になっていくのは感慨深いものがある。これこそが、フットパスの魔力なのであろう。

自治体間の連携組織を作るということは国が関与しても大きな自治体が音頭をとっても非常に難しいものである。第三セクターがいい例である。しかしフットパスは違う。陶醉のうちにいろいろなものを連携させる魔力がある。自治体にとっては、それほどお金はかからないし、NPOなどを活用して職員も楽しみながら地域の再発見ウォークを行っているうちに、地元と新住民が自然に一緒に一緒に目的に向かって協働を始め、観光資源が蓄積され、観光客が訪れ、悩み多い農業や産業の活性化が起きるのであるからこんないい話はない。

「誰も邪魔するやつはいないし、金がかからないし、こんないいことはないよ」という町田市の産業観光課の小池さんの一言がTBSラジオを通じて全国放送となったのもっともなのである。

○ 持続可能社会のモデル都市――25 のフットパスコースを持つ町田

➤ 成熟社会の先進都市

小野路のフットパスは町田市環境と価値観によって培われたものである。私が今は赤坂アークヒルズとなってしまった住まいから、町田に引越してきたのは1970年のことであった。しかし今から考えるとこれは偶然ではなく、町田には何かひきつけられるものがあったに違いないと思う。現在の住居を選んだのは母であったが、ここに居を構えることを決意するまでに、田園調布から北鎌倉まで何ヶ月もあちこちのここぞと思う住宅地を回ったという。そして鶴川を終の棲家とすることにしたわけだが、以来、40年弱人生の一番長い時期を町田で過ごすこととなったのである。住み始めた頃近隣のまちは尾根の緑を辿って歩いていくことができたそうだ。母は父と一緒によく町田市内や登戸や多摩川沿いのまちまで緑の尾根を伝って探検したそうである。その後ひょんなことから私までもが緑の尾根歩きに巻き込まれてフットパスに到達するわけであるが、町田はその頃から緑行政には力を入れていた。私はかなり長い間町田市の緑地関係の部署と付き合いきたが、八王子市を見習って都市開発を行っていた時期でさえ、町田の緑政は苦しみながらも尾根筋の傾斜地を残したり、動物のための（人間のためでもあった）コリドーのために緑の島を作ったり、緑地保全基金の制度を作って地元の相続が起きそうな農家を回って緑地の物納を薦めたりしていた。



町田の緑政：傾斜地は緑を残す。遠くに見える点々と散在する緑塊は動物のコリドー

町田の人たちは穏やかな人たちである。私たちは町田近辺の25のフットパス・コースを作ったが、しみじみ実感したことは、町田は昔から豊かな土地柄で人々も満ち足りて過ごしていたのではないかということである。農家や寺社など旧住民の方々と話をすると、ゆったりとした対応のところが多く、人柄のよさを感じるのである。

➤ ポケモンのふるさと

町田では職員も市民も落ち着いた町に住みたいと思っている。人口を増やして政令都市になりたいなぞとは思わない。市長選挙のときの候補者として好まれるのも主張の強い人物よりも穏やかでやわらかな紳士である。市と市民は他市に比べると比較的仲がよく、市

は市民活動を助けたり必要としたりしている、40万人都市でNPOが100以上もある。その市民活動に職員が休日にボランティアとして参加しているのも珍しくない。協働という言葉があるが、町田は意識せずに協働体制が昔から取られてきたまちなのである。落ち着いたまちなので豊かなセンスも生まれる。

実は世界的に有名になったポケモンも町田で育った。ポケモンがこうも世界中の人の気持ちを引きつけるのは、その優しさにあると思える。同じバトルであってもポケモンはどこか愛情が感じられる。ウィキペディアによると原作者の田尻智さんは「東京都世田谷区に生まれ、少年時代を町田市で過ごした。当時はまだ自然が残っていた町田市で、彼は野山や小川、時には防空壕跡や廃墟まで足を伸ばし、昆虫をはじめとした生き物の観察や採取を楽しんでいた。図鑑から知識を得ることだけに留まらず、収集や飼育に独自の工夫を凝らしていた彼は、クラスで一番の「昆虫博士」だった。この時の経験は、ポケットモンスターを作る上で大きな力となったと後に語っている。」とある。優しいポケモン達は町田の動植物だったのである。



➤ 環境先進都市の理由

このような町田なので、景観資源にも恵まれ、またそれを大事に思う人々がいて、フットパスの活動は起こるべくして起こったともいえよう。小野路を初め私たちは町田を基点として25のフットパス・コースを開発した。1つのまちで25もコースを持つ自治体は全国でも初めてであろう。町田の掲げる構想の1つは「環境先進都市」であるが、まさにこのようなまちこそその名にふさわしいと思う。町田市は通常あまり目立つことのないおとなしい自治体であるので、町田の住民のほとんどは多分町田での暮らしに満足していて、多くは町田が大変気に入っているということは案外知られていない。目の肥えて口のうるさいキャリアウーマンの私の妹でさえ最初は都心や成城学園などあちこちを探していたのにやっぱり町田は住みいいと戻ってきたのだからこれは間違いない。

町田は第6山の手とも言う人があるそうだが、ある意味では現代の最高の暮らしを提供してくれるところなのである。近場に新宿、横浜、町田、新百合ヶ丘等々、大中商業都市が様々選べる一方、多摩丘陵の自然や景観がすぐ側にある。多様な都会的な楽しみを得る

ことができるのに物価は安い。緑豊かで健康的な生活を享受できるだけでなく、自分達の目で確かめて安全な食べ物を得ることができる。人口構成も新住民と旧住民の区別ぐらいで複雑でなく統治しやすい。人も穏やかで民度が高い。私はこういう都市がこれからの理想の都市ではないかと思う。

そしてこのようなまちは、地方、しかも限界集落と呼ばれるところでも充分つくれるのではないかと思うのだ。近場に大中都市がなければ近くの地方都市を魅力のある都市に変えていけばよい。東京に行かずとも東京と同等の楽しみが得られる都市を作ればいいのである。日本の企業ならお手の物であろう。ただしここで間違っはいけないのは、東京と同じにするのではなく、おのおのの地域で求められるような形に都市を作ることだと思う。それぞれの地元が求めるような都市を創れば無理なく個性的ないい都市ができるであろう。町田のような暮らしやすいまちが日本全国に広がってほしい。

○ 売れるマップ

➤ 書店レジ前横積みで何千冊も売れる「多摩丘陵フットパス・マップ1」

私達の「多摩丘陵フットパス・マップ1」は書店のレジ前に横積みで何千冊も売れた。ほとんど営業や宣伝はしていないが、2002年に発刊してから増刷を重ね7000冊は売れたであろう。増刷すると必ず売れてしまう。「マップ2も発刊してほしい」という声が多く、2008年11月に周りにおしりを叩かれながら発行にこぎつけた。マップ2も発行が知られるやかなりのスピードで売れている。

内容は、表紙から裏まで16ページフルカラー、A4横位置の見開きで、6コースになっている。右側にルートをとった正確な地形図、左側に同じ地域に同じようにルートをとった俯瞰図と1つの地域を2本立てで説明してあるが、この2枚を切り離して持つことも想定に入れている。



実はこれには目標としたマップがある。イギリスの自動車工業会が出版した“カントリーサイド・マップ”である。マップというよりはマップ集という感じで、イギリス全土、約240箇所、1地域1枚で1冊にまとめてある。A4サイズ1枚の表にルートがひかれた俯瞰図、裏にその地域の訪れるべき場所や特色が絵を入れながら解説してある。巻頭にはフットパスで出会う動植物の図鑑と雨用のクリアファイルと一緒に綴じてある。旅行者はこのマップを持って車で旅することができる。訪れた地域のパーキングやビジターセンターに駐車し、その地域の分のマップ1枚を取り出して、クリアファイルにいれ、そのマッ

プや図鑑と共に歩き始めるのである。

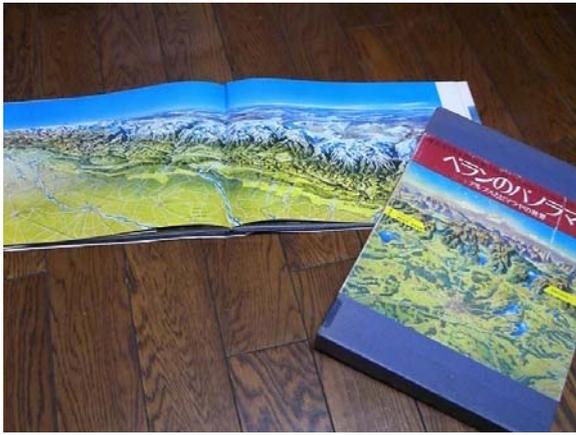
気候、植生、フットパスの密度など違うのでイギリス版と全く同じにはできないが、小野路などではたいていこのマップを持った方たちが歩いておられる。当会の会員数は現在144人だが、マップを買って歩いてくださっている方々が何千人もの会員であってくださっているような気がする。



➤ マップの売れる秘密

これだけ売れるマップの秘密は、誰が歩いても満足のいくコースを選び出せるコース・デザイナーの松本清さんの感性と、誰もが描けるわけでない地図絵を春夏秋冬何度も歩き木々の1本1本住宅の1軒1軒を見て正確かつ情緒豊かに描いてくださった加藤隆明さんの情熱である。日本の地図史でもまれにみるゴールデン・コンビであって、500円ではもったいないほどの世界が繰り広げられる。

このマップが人気のある理由の1つは、ヨーロッパ的な知的な地図の楽しみ方がこの地図ではできることである。枕元に置いて毎晩寝る前にこのマップの世界をイメージで歩きながら楽しめるとお手紙をいただいたこともある。ヨーロッパでは旅のおみやげに地図というほど地図が親しまれているが、日本にこの地図の楽しさをもたらしてくれた画期的な地図である。



精度の高いヨーロッパアルプスの地図

もう 1 つこのマップの人気は俯瞰絵の美しさにあると紹介されることがよくあるが、そうではない。美しさの中に地図としての正確さがあるのである。よく見ると俯瞰の中に実際には見えないが地図にある道が描かれている。絵であっても自分の位置がはっきりとわかる精度があるのである。

最近、散策マップという、イラストマップが使われがちだが、イラストマップは全く地図の情報、正確さ、楽しさを殺すようなものである。人間は自分がどこにいるのかわからないと不安である。したがってこのようなマップには必ず正確な地形図が基本となることが望ましい。また地図には見ているだけでいろいろな発見があり、またそれを実際の地形と比較するところで別レベルの発見が加わるのである。

➤ コース選びのセンス

しかしなんとといっても多くの方から「こういうマップが欲しかった。こういうのを待ち望んでいた」と言わしめるのは誰もが満足するつづの揃ったコースデザインである。町田市内に松本さんと私達は 25 ものコースを作った。緑や丘陵の中ばかりでなく開発されたところにも何とかよさそうなところを見つけた。見知らぬ土地での見つけ方は、グーグルで緑の固まった地域、多い地域を検討をつけ、後は 2500 分の 1 の地形図を持っていくつかの候補道を歩いて一番いい道を探すのである。

「マップ 1」はいるか丘陵の目からのどにかけての 6 コース、2008 年 11 月に発行した「マップ 2」では目からくちばしの 7 コースが追加となって、いるかの口からのどまでできた。既にコース・ファインディングを終わっている三浦半島突端までの多摩丘陵縦走コース「マ



多摩三浦丘陵の中の「マップ 1」「マップ 2」がカバーするフットパス（赤線の部分）

ップ3」ができれば、いるかの口からしっぽの先までの長距離フットパスができるであろう。町田市からの委託で2009年2月にさらに町田市内の12コースが発表される。町田市は町田を基点とした25のコースを持つようになるが、従来の観光とは全く違う感覚のフットパスのコースが全国に繋がれば日本全国の民度が上がるにちがいない。

○ フットパスとは

➤ イギリスのフットパスとその歴史的背景

フットパスの発祥地はイギリスである。コッツウォルズの蜂蜜色の家々、湖水地方の景勝地、緑の牧場の中の白い羊たちの間を縫って歩く人々の写真は成熟国家イギリスの象徴として日本人の憧れである。「パブリック・フットパスは庶民が「歩く権利」をもつ歩行道を意味している。歩行道は、舗装されていない自然の、耕地や牧場での畦道であり、森や川沿いの細道である。」平松紘

しかし現実のイギリスのフットパスはもう少し厳しいものである。ロンドンのテムズ川沿いのフットパスは街路樹もなく暑さ寒さは厳しいようだし、コッツウォルズのチップングカムデンには車でなければバスでいくしかなく到達するまでに結構時間はかかる、牧場の中は羊のフンだらけで足元も汚れる、ナショナルトラストが管理するアブベリーのストーンサークルもフットパスに着くまでに小一時間かかり、そのフットパスは古代から家畜の売り買いに使われた尾根道とのことだが殺伐とした石灰道が延々と続き、私のようにフットパスは楽しくなくてはと思っている浅はかなウォーカーには幻想敗れた思いであった。

しかし、フットパスはイギリスの歴史の所産であり、その背景なしにはフットパスを評価することはできないであろう。この方面の数少ない研究者の1人が青山学院の平松先生であるが、先生は思いがけずにも去年亡くなってしまわれた。実際の講演は1度だけうかがう機会に恵まれたが、これからこそがご活躍の時期で私もたくさん伺いたいことがあったのに本当に残念だった。

先生の「イギリス緑の庶民物語」によればイギリスの歴史は山、川、海、道などすべてを囲い込んでしまった貴族の土地の中で市民の活動する権利の獲得の歴史である。貴族の領地の中で家畜を放牧する権利、入会地の中でレクリエーションをする権利、などすでに17世紀頃から領主の土地の中での何かを行う権利を獲得しながらイギリス市民は生活してきた。「公園（パーク）」ですら本来の目的は貴族たちの狩猟や果樹園のために囲い込んだ緑地であって、初め庶民には立ち入りが禁止されていたが、後で「施し」として、開放されるようになったという。そのような権利獲得への戦いの中で、勝ち取られた他人の土地の中の道を歩く権利というのがフットパスなのである。特に18世紀になってロンドンに人口が集約し始め、19世紀に産業革命を経て労働者の労働環境や生活環境がますます苛酷になるにつれて、彼らの田舎や自然への回帰への欲求は高まっていった。ナショナルトラストの創始者として有名なオクタビア・ヒル女史は貧民救済のために小庭付きの住宅や、オープンスペースや景勝地の保全や、フットパスによるアクセス権の獲得に一生をささげた。ナショナルトラストやランブラーズ協会はこのような、市民の全般的な生活環境の改善-住宅、公園、緑地、道-の過程の中で生まれてきた組織である。

したがってフットパスは他の住宅供給やオープンスペースのアクセスなどの活動とともに、ただ単に環境を守るという表皮的な成り立ちではなく、背景にイギリス人の歴史を超えた生活の知恵や自由への思想によって構築されてきたものなのである。だから 1 本でも多く歩ける道を勝ち取ることが重要であり、どんな道でも大切な道である。全フットパス地図がきちんと作られている。それぞれの道の景観と共に自由と癒しのウォークが楽しまれているのであろう。

➤ 年間 30 億円のフットパス効果

平松先生によるとイギリスでのフットパスの効果は以下のように私たちの予想を超えるものである。(「イギリス 緑の庶民物語-もうひとつの自然環境保全史」参照)

現在イギリスの散策愛好家が最も誇りにしているパブリック・フットパスが「長距離歩行道」である。「長距離歩行道」には公式的なものと非公式なものがあって公式な「ナショナル・トレイル」は 21 本(表参照)、非公式な道は無数にあるといわれている。このほかに非公式長距離歩行道は 50 あり、自治体や団体によって設定され管理されている。ナショナル・トレイルだけでもロンドンーローマの往復に相当するほどの距離があり、「日本フットパス協会」の設立シンポジウムで講演して下さるナショナル・トラストのジョー・バーゴン氏は最近開通した“コッツウォルズ・ウェイ(チップング・カムデンからバースまで)の最高責任者である。多くの「長距離歩行道」がイングランド史を辿るかのように設置され、多くの人々の散策道として整備される。その政策は、まさに歴史とプラグマティズムを兼ね備えたイギリスらしさそのものだそうだ。



とくに整備された「ナショナル・トレイル」は週末の 2 泊 3 日、あるいは 1 週間以上の散策を求めて設置された公道である。全トレイルにおいて年間 300 万人もの利用があり、そのうち 4 万人は 1 週間から 2 週間かけて楽しむ。その半分は 20 ポンド(4000 円)、1/4 は 20~50 ポンドで一宿を取る。トレイルに沿ってある B&B という朝食付き民宿かインという小ホテルが繁盛する。大部分の日帰り散策者も平均 5 ポンドを費やしている。こうして「ナショナル・トレイル」が国家的な観光事業の一環として位置づけられるのも、イギリスらしい。最も利用されている「ナショナル・トレイル」で約 1000Km ある「南西沿岸道」では、年間約 30 億円の経済効果があるという。

この内訳については是非バーゴンさんに伺ってみたいところだが、経済効果が大きいことは、ナショナル・トラストやランブラーズ協会などの団体が 100 年を経て大きな組織に育っていることからもうかがえる。ナショナル・トラストは会員数 400 万人、常勤 4000 人、

イギリスのナショナルトレイル一覧

ボランティア4万人、年会費40.5ポンド、資産を持ち土地の購買能力もあるイギリス最大の保全団体である。またランブラーズ協会は会員数14万人、常勤64人、ボランティア5千人、年会費25ポンド、資産は持たないがフットパスウォーキングの団体である。

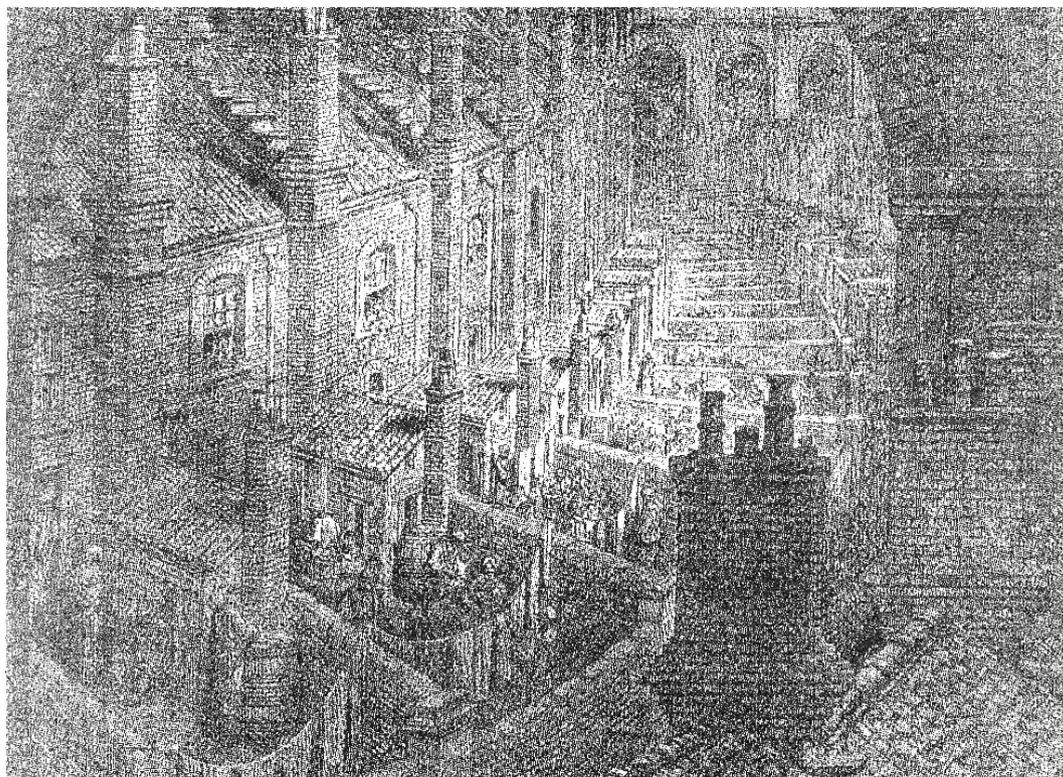
➤ 日本のフットパスの出現は歴史的必然性

日本の場合、特に昔からその地域の人々によって使われてきた里道は、たいていが赤道、つまり公道である。道を歩いている分には誰からも文句を言われる筋合いはない。したがってイギリスのように地主さんから道を歩いたり、私有地でそこで何かするための権利を地主さんから勝ち取るなどという対立の歴史は日本にはない。

しかし日本でも最近フットパスが関心をもたれるようになったのは、イギリスが100年前産業革命の後に辿った脱工業化社会の人間性回復の過程を、バブル経済のはじけた今の日本も同じように辿っているからのように思われる。

和光大学の岩本陽児先生は私たちの総会で一度「ビクトリア時代後期の県境保全運動と全国里道保存協会」というテーマで講演して下さったことがある。

これによると、イギリスでフットパスが出現したのは、産業革命(1760～)の後である。産業革命は急激な都市化をもたらし農村を荒廃し、鉄と石炭は公害を発生した。入会地や緑地も鉄道の建設によって破壊され、ロンドン市民は劣悪な住居環境の中での生活を余儀なくされていた。一方、都市問題が深刻化するにつれて、都市知識人の間でも、村落共同



産業革命後のロンドンの市民の劣悪な住居環境

体の生活を懐古する田園ノスタルジーが広がっていった。このような社会・経済的そして知的背景の中で、1860年代にロンドンの貧困地区で、中産階級が指導する社会改良(慈善)運動として出発したのがフットパスだったのである。したがってフットパスも環境保全運

動の1つの形であったのである。そして1880年代になるとこの環境運動に貴族が賛同するようになり、チェンバレンやチャーチルなど歴代の首相にも影響を与え、1907年ナショナルトラスト法という法律となって制度化されたのである。

現在の日本の状況は、ある意味で、この100年前のイギリスに似ている。バブル経済がはじけた後、ついに多くの失業者を出すこととなった経済状況の悪化、農業や農地の荒廃による食糧自給率の低下、一方で中国の餃子に象徴される食糧安全への危機感、勝ち組負け組みに二分化する社会、そして拍車をかけた米国サブプライムローンの打撃による若者の就職難。日本は未曾有の閉塞感が漂っている。市民の関心が癒しや懐古に向けられるのは当然である。今日本でフットパスが登場するのは歴史的必然であろう。経済のみならず社会構造や価値観そのものの変革が試みられている。フットパスは新しい時代を起動するスターターなのである。

(赤道というのは、道路法が適用されない道路、即ち法定外道路のことで、かつては登記所に備え付けられた公図に赤色で着色することが義務づけられていたことにより、赤道、赤線と呼ばれるようになった。この赤道はその形態により里道(リドウ)、農道、けもの道、間道、路地、脇道などと称されているが、「里道」が一般的に使用されている。里道というのは、昔から自然発生的に生まれた道で、農作業に使われたり、山に薪取りのために通じていた道とか、集落内の往来に使われていた道など。

里道と言う名称は明治時代に、従来の道路の等級を廃止し、一般交通の用に供される道路を、国道、県道及び里道に分類したことにより生まれた名称である。その後、旧道路法が公布され、里道のうち重要なものが市町村道として認定されたため、現在の里道が取り残された。これらの道路は明治以降の道路関係法令上、道路としてその設置、管理について規定されることなく、従って管理者がはっきりしないまま現在に至っている。しかし、基本的には里道の所有者は国(建設省)であり、維持・修繕等の機能的な管理はその所在する市町村が行うことになっている。皆さんの周辺にも道幅2mにも満たないような、小さな路地やあぜ道、山道があるはずで、それが赤道、里道である。里道は全国各地に散在しており、建設省が行った調査によると、全国に約4300平方キロメートル程度存在するものと推定され、この面積は山梨県の面積とほぼ同じだという。インターネット<http://www.civiltec.co.jp/roadarena/akamiti.html>から引用)

➤ フットパスは成熟国家の象徴

と考えると、フットパスとは、イギリスのような西洋先進国が100年ほど前に脱工業化を経験したと同じように、バブル期を経て成熟国家へと成長しつつある日本にとって新しい社会システムを起動する媒体であるといえよう。平たく言えば、フットパスをやってみると、いろいろな波及効果があがってきて新しい社会を創造するための力となるということである。単なる健康のためのウォーキングとは違う。ウォーキングの目的は自分が健康になったり、癒しを得ることである。フットパスの効果は自分の健康や楽しみは当然ながら、地元との交流や活性化を促すことによって、農業を再興し地元や近隣の地方都市を生き返らせることができってしまうことである。



フットパスの仲間で小林さんの稲刈の手伝

日本のフットパスはこの地元を活性化するという点を主眼点におくことでイギリスのフットパスとは少し違う。しいて言えばイギリスが返って日本のフットパスに学ぶところもあるかもしれない。実際にランブアラーズ協会のミルズさんにもナショナルトラストのバーゴンさんにも「心に響く、自分達が学ぶべき点だ」とおっしゃっていただいた。イギリスでもフットパスの途中にあるブルーベリー農家などで販売をしてもらおうようになったら協力的になったとも教えてくださった。これまで地主さんからいかに道を通る権利を獲得するかという闘争の歴史であったイギリスの背景を考えると、根室MOBITの伊藤さんのところのように「牧場主が自分からフットパスを開放するなんて考えられない」のだそうだ。

フットパスを作りながら地元を歩いていくうちに、自分達の地域の本当のよさがわかるようになり、愛するようになり、まちづくりへの意欲がわきあがってきて、実際に経済効果も出てくる。活気が出ると、情報も、金も、人材もすいよせられてくる。どこから手をつけたらいいかわからない今の日本で、全国の自治体がフットパスをやってみると、日本社会全体の底が上がってきて、不況や低経済成長の中でも足を地に付けてやっていけるようになる、次の好景気を呼び起こすための足固めができるということである。フットパスは成熟国家の象徴ということであろう。



東京の女性に人気の根室フットパスのポスター

私たちは、日本全国の自治体、特に大変な思いをされている自治体で是非このフットパスを試みていただきたいと願う。ただし、何でもいいからやればいいのか、これまでの観光地を繋ごうとかとではうまくいかない。いくつかのポイントがある。成功への公式がある。これを少しご披露してみたい。

○ フットパスによるまちづくりの公式

フットパスはどんなまちにも創ることができる！というのが私たちの提案である。そしてまちづくりへ効果を発するにはいくつかのノウハウがあるが、そのノウハウさえクリアすればどんな地域においてもフットパスはまちづくりを成功させる公式になることができる。緑が少なくたって、舗装道路ばかりだって、荒れた自然しかなくたって、若い人がいなくたって、公式にはまっていればいつかいいまちになると信じて次の公式をご披露しよう。

➤ フットパスは安価で手軽で失敗しないまちづくり—まずやってみよう

フットパスは自然のそのままを活かすことが身上なので経費がかからないので気軽にやってみよう。またまちづくりの基礎である地元の意識の昂揚、地元住民と新住民・行政との意識の統一が確実な成果となるので、たとえ続かなかったとしても何も失うものはない。まちの問題点や要望は各地域で違うので、その後の方向性は各地域で自由に色づけできる。ただし、上からの一方的な作り方はせずに、NPOや地元住民と協働して楽しく行う。

➤ どんなまちにもフットパスは作れる

フットパスはどんな地域でも気軽に始められる。特に限界集落といわれるような地方の小さなまちでは、景観と自然はとりわけ素晴らしいに違いないので、フットパスのコースを作るのには最適ともいえよう。資金もほとんどいらないので気軽にトライしてみることができる。



kazusin.blog.so-net.ne.jp/2008-04-02-2より美しい限界集落

➤ 何の資源も持たない地域のほうが成功する

北海道ではフットパスを導入する自治体が多いが、ここでフットパスを紹介しているコンサルの NPO エコネットワークの小川さんによると成功の秘訣は「へたに観光地をもっている地域よりも何も持たない地域のフットパスのほうが成功している」だということである。これまでの観光とは似ているようでだいぶ違うフットパスを取り入れるのには、虚心坦懐に地域の本当の魅力を再度探し出し、儲けを前面に出した従来のおもてなしではなく、心をこめた何気ない人と人との交流をのびのびと行うことが必要である。

➤ 自分のまちを自慢し合おう

私が町田をいい町だと褒めて書いているように、住民が自分のまちを心から愛し、自慢に思い、自分のまちを見に来てくれと誘い合うことがフットパスの根本理念である。このようなまちが全国にできれば国は豊かになる。これこそが政治の原点である。自分のまちを愛すること、森を愛すること。

➤ フットパスはテーマのない歩き

フットパス・ウォークの第一人者である「みどりのゆび」の松本さんは、フットパスはテーマのない歩きであると言われる。ただあるのは、いろいろな出会い、発見、感動である。フットパスは歴史だけでも、自然だけでも、観光だけでもない。しかし歴史も、自然も、観光も全部含まれている。

➤ フットパス・コースの選び方が成否の鍵—センスが勝負

一番大事なことはコースの作り方で、いいフットパスができるかが成功の鍵である。フットパスは人を呼び込むための道具。人がこなくては意味がない。しかもリピーターで来てもらわなければならない。どんなフットパス・コースがいいか。自然、歴史ウォークなど、いろいろ試行錯誤して来た結論は、まず歩いてみて気持ちのよい景観のよい道を繋いでいくことである。名所旧跡や景色のいいところを点として繋ぐのではなく、まず目にも足に



も心にも気持ちのいい道を繋ぐのである。景観の道ができてから、近くの名所を副ルートとして取り込めばいいのである。

いいコースが作れるかどうかはセンスのいい人材を確保できるかにかかってくる。でもこれはプロのコンサルタントでなければという話ではない。自治体の職員やNPOの中にもセンスのいい人はおられるし、育てることができる。また、地域間で視察をし合うことによってセンスを磨くこともできる。自治体間のコースの水準が一定になると周遊コースが組めて多くのお客を各地域に運ぶことができる。

➤ フットパスに適した道-「景観」は本当に大事なのです

繰り返しになるが、フットパスとしてのいい道というのは、わかりやすくいえばいい景観を繋いだ道である。歴史やウォークや自然観察会など様々なウォークを行ってきたが、歴史も自然もマニアックな少数派になってしまう。また、名所は一度訪れれば二度は行かないことも多い。それに対し、心に響く風景を繋いだコースにすると老若男女どなたでも多くの方々が来てくださる。一度気に入れば四季折々きてくださるのである。まだ日本では十分理解が進んでいないが、“景観”というのは本当に大きな力があることを私達は痛感している。不思議なことに小野路などの里山の風景はこのようなところに育ったことがない人や外国人でさえも魅了する。人間の生物としての記憶が覚えている景色なのかもしれない。



谷戸は人類にも他の生物にも記憶の奥の“ふるさと”

➤ フットパスに適した道—土の道

また、舗装=悪い景観というわけではないが、舗装の道は長時間歩いていると足腰が痛くなり、私たちはできるだけ足に快い土の道を積極的に選んでいる。土の道や緑のにおいが快よくいくら歩いても疲れな。田舎なのに小さな路地や墓道まで舗装されているとがっかりする。せっかく公園の中にありながら整備されすぎてしまった道も資源が台無しである。大きな川沿いの道で舗装されている上に防災のためといって沿道の樹木も切り倒されたりしているところは、夏の暑いときなど辛い。テレビで見た飛騨の白川郷もせっかく

の1軒1軒を繋ぐ道路が舗装であって“観光地”になってしまったのだなと思った。

舗装しなくとも雑草を適度にはやしておくとし道も侵食を受けないし舗装の経費もかからずいい景観も得られる。大きな公園はその中よりも返って外側にフットパスに適した景観や山道などが残っていることが多い。舗装道路は工夫次第で簡単に土道に戻る。雑草をはやした元のような道に戻したら魅力が倍増することであろう。

➤ 楽しくなきゃフットパスじゃない！

フットパスの1つの特長はこの湧き上がるような楽しさで、フットパスに魅入られると本当に楽しくなり勇気がわくことである。フットパスの話になると、当会の理事会でもだんだん熱を帯びてくる。どうもフットパスにはそのように人々を楽しくするものがあるらしい。コースが楽しいと自然に足が伸びてまた訪れたいくなる。

雨の日に歩くのも好きな方はいいけれど、高齢の方で寒い日に途中で帰りたいと言えずがまんして後から耳が聞こえなくなった方もおられた。無理はお勧めしない。フットパスはやはり癒される道、気持ちのいい道、また行ってみたい道、が基本であると思う。フットパスの根本は楽しいことである。辛くても健康のためなどというのでは長続きせずリピーターもできない。

イギリスのフットパスは歩く権利を獲得するために得た道なので少々よくない道でも大切にする。しかし日本のフットパスは道のあり方も歴史も目的も違うので、気持ちのいい道作りをしないとリピーターは望めないかもしれない。



フットパスは楽しくなくっちゃ！

➤ マップは必需品

「みどりのゆび」の毎月の定例のウォークにはそれほど多くの人集まらない。せいぜい50人であるし、講師の解説がつくときには2~30人が望ましい。しかし私達の「多摩丘陵フットパス・マップ」は口こみで7500冊売れている実績がある。私達はこの7500人の

方々も会員であると感じている。フットパスを歩くのにはイギリスのように三々五々でのびのびと自分のウォークを楽しむのが基本なので、マップは必需品であり、いいマップであれば資金源にもなる。イラストマップではなく、行政の都市計画地図や市販の住宅地図のように2500分の1のようなきちんとした地図を基に作成すると、迷いにくく情報の多い地図ができる。マップは無料で配布するのではなく必ず販売すること。欲しい人に欲しいマップが行き渡るためである。

マップはこれからの観光やまちづくりにも欠かせないアイテムである。

➤ リーダーを作る-そのまちを愛する人、そのまちの歴史や自然を愛する人

活性化しているまちには必ずリーダーが存在する。逆にフットパスを始めようとするような地域には住民の力が育っていて行政が動くときには社会的に熟していることが多い。協働体制は自然に取れる。長井市には浅野さんと鈴木さん、受け皿のNPOとしては菅野さんと青木さん、甲州市は三森さんと中村さん、NPOとして高安さん、黒松内町では新川さんと小嶋さん、NPOとしては新川幸夫さん、などお顔がパッと浮かぶ方たちがいる。限界集落のように高齢者しかいない村落では、フットパスによって地域への関心を高めれば、若い人の中でまちづくりに興味を持つ人が残るであろうし、都会から希望する若い人を呼び寄せ、適任者がいればまちづくりの担当者に抜擢することも今後の時代は十分考えられることと思う。そのまちを愛する人というのがリーダーの基本である。若い人の就職難の時代でもあるので、限界集落を若い人たちの腕試しの場として提供するなら、日本には7500のチャンスが若い人を待ち受けることになろう。

➤ 小さくてもいいので地元のための現金収入獲得策を考える

多分、これが私たちが地元とうまく交流ができるようになった基本であったと思う。フットパスを歩くというウォークへの参加者の利益だけでなく、歩かれる地元の利益も同時に考えなければ長続きはできない。このことは緑地保全からスタートした私達の基本的な姿勢である。「フットパスまつり」というイベントを作り、歩いていただくと共に地元のお母さんたちに郷土食を作っていただいたり、手作りのゴマや梅干や地粉（地元で取れた小麦）の饅頭などを販売に出していただいたら、農薬も使っていない農家の庭先の産物なので消費者にも大変に喜ばれて大変売れたのである。私達も最初はこんな子供だましみたいなことをやっても効果などそんなに出るものではないだろうと覚悟していたら、思いがけない現金収入で予想以上に地元の方に喜んでいただき、思った以上の効果にこちらがびっくりしてしまった。手ごたえがあると早いもので、これが村中に伝わり、そちら向きの風向きになってしまった。フットパスまつりは年にせいぜい1、2回のものであるが、これをきっかけに諸々の活動が活発化し、小野路全体が盛り上がっていった。ついには、朝日新聞の「にほんの里」100選に小野路は東京からのオンリーワンで選ばれてしまった。これは小野路の町田暦環保全組合長、田極さんが町田市と共に田んぼを再生して選ばれたということであるが、選考条件として村全体が活性化している地域という基準が謳われていたので、選ばれたことは小野路の底力が上がっていたことの証明にもなる。

にほんの里100選

すこやかで美しい里を未来へ



■026 小野路(おのじ) = 東京都町田市■

◆新しい入会の発想生む

多摩丘陵の歴史環境保全地域とその周辺集落。地元農家の管理組合が都と契約して伝来の農作業を行い新しい入会(いりあい)の姿を築いた。

➤ 地産地消の範囲で考える一地域を主体に

村に活気が出たら、活性化を根付かせるためにも、安全な食糧を確保するためにも、自給率を上げるためにも、これからは農業がかかせないと思われる。特に、国内の低経済成長の浸透、外交的なバランスオブパワーのかけひきが多くなっていく今後は、有事に備えた底力のある国づくりのために農業は必須である。しかし現在の農業は、機械化して生産量を上げ、全国に流通させたとしても、なかなか人件費も出せないような過酷な産業である。中国など外国に頼ってしまったら食の安全は守れず有事の際には日本は食べていられない。ある程度の人件費を確保し農家やその後継者に安心して農業を続けていただくことができる、市民が安心できる農産物を手に入れることができる、遊休地を活かして自給率をあげることができる、という条件を考えていくと、農産物を流通させるのではなく都市住民を呼び寄せ共に作り消費する地産地消でないと日本の農業は残らないことになると思う。今後の活性化の基本的範囲は地産地消ができる範囲であると思われる。

おもてなしの観点からも、土地の産物を全国に流通させるのではなく、フットパスなどによって訪れた人が現地で食べられる、もしくは現地のみやげとして持ち帰る生産量が一番望ましいと思う。流通体制を整える過程で農村社会は崩壊してしまうし、安全面や品質でも次第に落ちていく。うまいものは現地で食べてこそおいしいし、ありがたみがある。

フットパスは多くの多様な人材を都市から地域にひきつけることができる。自治体が欲しい人材、地域が欲しい人材を呼び集め、そこに似合った産業を開発するために、フットパスは有効である。そしてそれこそが地域の活性化である。



勝沼あさいち

➤ 若い人や都市住民が暮らせる環境を作る

限界集落など地方都市に都市住民や若い人が来てまちづくりを始めるのなら、そのまちや近隣の都市に、大都市に行かなくとも先進的な情報や感性を得られる拠点や研修設備を整備することが必要になるであろう。このときに地場企業や大企業が支援して地域それぞれの個性ある“再開発”ができるチャンスがくる。「日本フットパス協会」では全国のフットパスの担当者を研修として毎年シンポジウムを開催したり、本場英国のフットパス視察に行っていただくなどのイベントを用意することが考えられている。

➤ 近くの地方都市を魅力的に再建する-地方都市再開発のチャンス

また、近隣の地方都市を都市住民や若い人が魅力を感じるような都市に再開発する。東京に行かずともハイセンスな生活ができるように、その人々の要望やライフスタイルに合った各地で個性的な都市創りを行う。大企業や地元企業が一緒になって、町田の例のように、素晴らしい景観や環境、民度の高い都市的な感性、リーズナブルな生活という条件を備えた住みやすいまちが日本各地にできたら素晴らしい国になるであろう。

➤ 地域と地域のフットパスを介したネットワークを作ろう

現在の日本の皆の思いは同じであろう。雇用の創造、経済の立直し、限界集落問題の解決、観光の活性化などどこから手をつけたらいいか。いろいろ素晴らしい試みが各地でなされている。しかししたいのものはそこでは成功していても他にはそのままあてはめることができなかった。フットパスはどこでも成功する公式である。また、フットパスを推進していくと日本が今抱える諸問題の解決策が見えてくる。フットパスこそこれらを連携して解決できる道具、接着剤である。フットパスという視点で作りなおすと日本全体が繋がってくる。人と人をつなぎ、地域を繋ぐ。人のフローと経済のフローを日本全国に流す。

➤ 交通ネットワークを作る

各地にフットパスの連携ができてきたら、JTBやJR、私鉄、などと提携して、これまでと視点の違う周遊旅行を組むことができる。周遊券を組めば、人情としてはできるだけ遠くに出かけたいものである。大勢の人々が遠隔地まで各地のフットパスを楽しむために出かけることとなる。

例えば2月は長井市には13日頃に「雪灯りまつり」、黒松内町には22日頃に「かんじきブナウォッチング」という雪関係のイベントがある。「雪灯りまつり」は幻想的で長井市は商工会議所が経営するいい宿もあり本当に美味しいものが多種あるところである。「かんじきブナウォッチング」は、黒松内町が北限のブナ地で、そのブナを2mも積もった雪の上で見るので普通では見られないアカゲラの穴などが見れたり都市住民には受けそうな内容である。黒松内は温泉も宿も町営でフレンチシェフの作る酪農関連のオードブルも最高の

味である。そこに、センス抜群の甲州市勝沼の2月のバレンタインなど、ブドウやワイン農家はシーズンオフなのでイベントを組むことができれば、2月の周遊券のできあがりである。このような感じで、フットパスを使えばこれまでにない商品が、各地の自治体間にできることが十分考えられる。

○ フットパスを作ってみよう

では実際にフットパス・コースを作ってみよう。

第一段階

① 全体計画を作る

(東京農大、麻生教授による「市民参加による「すきなみち」調査」参照)

まず、地域全体のフットパス・ネットワークを考えながら、今作りたい地区のフットパスの起点終点、回遊ルートを見つける。フットパスは繋げて歩けること、反対にどこからでも戻れることを意識して道作りを行う。ビューポイント、ランドマーク、歴史的文化的資産、公園緑地、貴重な自然、雑木林、まとまった谷戸の景観などをチェックしていく。途中の休憩所、トイレ、案内板などの位置も意識しておく。トイレは切実な問題。

一番大事なことはコースを選ぶ感性なので、最初はフットパスをよく知る専門家にポイントを聞き、感覚として理解するために一緒に歩いてもらうことをお勧めする。

専門家として、これまでお目にかかった中でコンサルタントとしてお奨めと思ったのは、東京農大の麻生恵先生、同じく農大の栗田先生、元日本ナショナル・トラスト協会の松本清さん、北海道のエコネットワークの小川巖さん、(財)北海道農業企業化研究所の岩井宏文さん、長井市の元建設課の浅野さん、ラック研究所の屋代雅充さん、甲州市勝沼の三森さん、大阪産業大学の川口将武先生のグループ、中部は名古屋の椋山女学園大学の武長脩行先生、大阪は大阪府公園緑地課の宮崎政雄さん、などなどである。

北海道の自治体でフットパスが盛んに行われているのは小川巖さんの力が大きい。“小川学校”といわれているようだが、小川さんは道庁を辞められた後、NPOを作りながらあちこちのまちに若い人材を育て、行き詰っている観光に代わりフットパスを推進してこられた。

② フットパス・コースを作る

私たちがフットパス・コースを最初に作ったときは、自分達の気に入ったコースをだいたい作っておき、それを東京農大の麻生先生のグループと共に「すきなみち調査」を行いながらマップを作っていた。2500分の1の都市計画図や住宅地図などの地形図をもって歩くと小さな道も全部載っているので便利である。これは自治体の都市計画課に行けば必ずある地図である。1万分の1くらいでも道は拾えるが、2500分の1だと細かな情報まで読めて専門的にはお勧めする。センスのいい道を選ぶ専門家や地図を読める専門家がいて

麻生教授による「市民参加による「すきなみち」調査」

くさればそれにこしたことはないが、素人だけでも十分できる作業である。気になるところは何度も見についてその近辺にもっといい道がないか何度も確かめる。1つのコースを決めるのに 5~6 回は歩く。思いがけないいい道が見つかったりして下見のほうが楽しい。今でもあちこちの道を母など気遣いのない人々数人と巡り歩いたことは心に残る楽しい思い出である。この過程は心が豊かになるのでこのあたりからフットパスにはまる人ははまってしまう。結構いい道が見つかるものである。

③ フットパス・マップを作る

歩くマップで重要なのは、イラストマップではなく、地形図を基にしたマップでないと歩けないということである。2500分の1、5000分の1、1万分の1などの地図を基本に、方位、縮尺、高圧線の位置などを地図にしっかり入れ込む。高圧線は実際に歩いてみると大変頼りになるランドマークである。地図に、すきなみち調査などでチェックした、ビューポイント、ランドマーク、歴史的文化的資産、公園緑地、貴重な自然、雑木林、谷戸、途中の休憩所、トイレ、案内板などを入れていく。マップには順路として番号を振り、その地域の特徴や分岐点、わかりにくいところを解説する。順路に番号を振るのは、言葉の読めない外国人でも道に迷った方でも番号をたどっていけば終点に着くことができることが理想である。マップだけで歩けることが目標である。

イギリスでは1つのまちが1ページで240箇所を俯瞰図上に描いたカントリーサイド・マップがある。日本でも「日本フットパス協会」として各地のマップがこのように繋がることを期待している。

④ フットパス・サインを整備する

どんな道標を作るのか、何を書くのか、道標を立てる目的は何か。ただ道案内をすればいいというわけではない。道標は来る人、また地元の方たちとのコミュニケーションの道具でもある。

私たちがウォークを始めた当時はまたウォーキングをすることがあまり歓迎されていなかった。私達が歩くと畑の作物が盗まれたり缶やゴミが捨てられるというのだ。今では悪いことをするのは2~3人でくる盗掘のプロで、私達のように集団でウォーキングしているグループはリーダーがついているので悪いことはしないという認識が広まって全くそのようなことを言われることはなくなった。したがって当時はそのような状況の下でコースを整備するにも道標1つ立てるにも大変だった。おおかたの日本の道は赤道（公道）なので道を歩くことは法的にも保障されている。しかし感情的には人様の畑のまわりを集団で歩くことはいろいろな問題を生み出す。そこで道標1本立てるたびにその周囲の地主さんすべてに挨拶をしてまわり、道標自体には私たちのカントリーコード（利用のルール・マナー）を書いて、その地域を守ってこられた地主さんたちへの感謝の言葉、私達の活動の趣旨、そして電話番号など連絡先を明示した。私たちは道標をウォーカーへの案内とするのではなく、地主さんや地元の方々に私たちの活動を理解していただくことを大きな目的とした。その結果、私たちの緑地の隣の畑の持ち主の奥さんが犬を連れて散歩しながら道標

多摩丘陵カントリーコード（憲章）

- 道から外れ、田畑、樹林、屋敷などに立ち入らないようにしましょう（ほとんどの土地は民有地です）。
- ゴミなどを放置せず、必ず持ち帰りましょう。
- 動植物、山菜、農作物の採取はやめましょう。
- 地元の方の作業、通行、生活の邪魔にならないよう、心がけましょう（車は駐車場に。アクセスはなるべく公共交通機関を利用しましょう）。
- この素晴らしい風景を維持・管理されている地元の方々への感謝の気持ちを常に忘れないようにしましょう。
- 地元の方々による田圃風景の保全や維持管理活動への支援を考えましょう（経済支援、地元での農産物等の購入、社寺等での賽銭の献納など、労働支援、農作物や里山管理、ゴミの除去作業のお手伝いなど）。
- この風景を首都圏全体の文化的資産として位置付け、これを皆で守り育て、地域の安定した発展に結びつけるための方法（法制度、施策、事業など）を考えましょう。

NPO法人「みどりのゆび」

042-734-5678

をよく読んでくださっているのを見たりしたが、次第に地元の方々が私たちが信用してくださっていくのが感じられるようになった。緑地の作業もよく見てくださって「よくやってるね。」とかゴミを拾っていると感謝の言葉をいただいたりした。

平松教授もイギリスでは「カントリーサイドを歩いているとところどころの道でその標識をよく見かける。それはイギリスカントリー・サイドのシンボルだ。パブリック・フットパスの標識は、日本の山にあるような単なる方向指示ではない。パブリック・フットパスは庶民が「歩く権利」をもつ歩行道を意味している。歩行道は、舗装されていない自然の、耕地や牧場での畦道であり、森や川沿いの細道である。」と書かれている。どこの国でも道標はコミュニケーションの道具なのである。

道標を立てるとすぐ問題になるのが抜かれたりいたずらされたりすることである。行政が立ててもそうであって公園緑地課の担当者も「いつも追いかけてこなんですよ」とのことであった。私たちも最初のうち1回だけそういうことがあったし、立てることをお願いに行くと頭ごなしに怒鳴られてしまったこともあった。そこで考えたのは道標を文化性の高いものにすることであった。ドイツの道標の写真を見たことがあった。赤頭巾ちゃんの物語をモチーフとした素晴らしい木彫りの彫刻であってそれ自体が芸術である道標であった。このような道標であったら誰も抜いたりいたずらはしないであろうし、その土地の文化が感じられて道標以上の価値を持つと思った。



NPO夢連の道標

そこで、小野路の有名な切り通しの道標を江戸時代の高札の形にして、筆字の候文（そうろうぶん）で「比道は布田道にて、幕末に近藤勇らが通いし道に御座候 是より関屋を経て三町歩で小野路宿に着き申し候」と書き込み、昔の小野路宿の墨絵も貼った。この道標は細い支柱に支えられているにもかかわらずまだ一度もぬかれたりいたずらされたことがない。他の道標も五寸角の太い支柱と厚い杉板をを町田市のえびね苑から分けていただいてお手製としては立派なものを作ることができた。ペンキを塗ったり達筆な方に文字を書いていただいたり金属の形抜きで「みどりのゆび」をスプレーしたり、えびね苑の職員の方に指導していただいたことが懐かしい。

イギリスではそれぞれの自治体が道標の整備をするよう法で定められている。ナショナルトラストやフットパスを表すロゴが定められていてわかりやすく、ロゴを見ると安心する。イギリスのフットパスにはかなり頻繁に要所要所に道標があるが、実際に歩いてみた感想ではやはりところどころで迷い、人に道を聞くところとなった。できれば一番いいのは、道標に番号をふりマップにも道標に同じ番号をふって対応することである。私たちも自分のフィールドでは行っているが、コース数が多くなってくるとなかなか難しいので、「日本フットパス協会」ではマップと道標番号を一致させるシステムを基準化するのがいいと思われる。



⑤ フットパス・ウォークを開催する

フットパス・コースが決まったらウォークを開催する。最初は仲間内で行い、自信がいたら参加者の公募を始める。自治体の広報やミニコミ誌など30名くらいが引率も楽である。午前9～10時から昼食をはさんで午後3時くらいまで、8km前後が高齢者も含めたウォークだとだいたいどなたにも満足いただけると思う。これで足りない方はご自分の駅まで歩いていただくとか、大変な方には午前中でお帰りいただくとか調整できる。解説は付けても付けなくてもいい。フットパス・ウォークは景観や自然を楽しみながら歩くものなので、是が非でも解説が必要ではない。ところどころ重要なところで担当者が解説を付けるのもいい。

解説にもいろいろある。私たちの会も月に必ず2～3回はいろいろなウォークを行っている。歴史ウォークは古街道の専門家の宮田太郎先生の解説付で講師料付参加費1000円、10時からだいたい3時まで、で常連さんが2～30名くらい参加される。自然観察会は地元の

高校の数学の鶴岡秀樹先生が小野路の万松寺からならばい谷戸まで 3km くらいをゆっくり自然の定点観察をしながら歩く。これはかなり自然が好きという常連さんが 10 人くらいのこじんまりとした規模になっている。この他、「みどりのゆび」の理事にはスミレ博士の山田隆彦先生、元日本ナショナルトラスト職員で本当にフットパス・ウォークらしいウォークをしてくださる松本清さん、小野路や新撰組の研究者である小島資料館の小島政孝館長、などなど、多彩な顔ぶれが揃っていて、専門家講師には事欠かない。特に専門はなくとも、会員の要望に応じて毎月ハイキングを開催して下さっている杉原正巳さんのように地域ガイドを養成することも考えられるであろう。町田のフットパス仲間の NPO 夢連さんでは名ガイドを多く出しておられる。

第二段階

⑥ おもてなしの体制を整える

おもてなしというとすぐに観光のように名物商品を作ったりそれを流通に載せたりすることを考えるが、フットパスの場合には儲けを前面に出したり、あまり商品らしくしないほうがよいのである。観光に飽きてフットパスに来るのであるからおなじおもてなしではすぐに飽きられてしまい、魅力もなくなる。小野路の場合には、金ゴマ、梅干、味噌、地粉の饅頭などが人気商品であるが、ウォークに参加して郷土食のお昼をいただき後、これらのおみやげを買って帰り、ご自分の家で土産はなしをしながらこれらを味わって二度楽しまれたりするようである。小野路のおもてなしのいいのは、作ったおもてなしでなく、ここには元から、誰か旅人が来るとゆっくり、話をした後あがれと言われて漬物とお茶をご馳走になったりする風土があって、旅人は小野路の人に会いたくて何度もリピーターとしてくるのである。ふるさとのような景観と人柄のいい土地の雰囲気人が呼ぶのであろう。

フットパスがまちづくりとして成功するには地元が活性化する活動が必要である。おもてなしを通じて地元にお金を落としながら外部の人々と気持ちを通ずるしくみを作る。その地域の背景によって何をおもてなしとするかは違ってくると思うが、あまり構えることなく、地元の生活や食をそのままの風情で出せばよい。

小野路のフットパスまつりでは、100 人募集、参加費 1000 円、合計約 10 万円で、保険料、講師料、レジメ代、昼食代がだいたいツープレイでまかなわれる。内訳は、100 人として食事代 600 円、講師料 250 円、保険料 60 円、レジメ料 90 円食くらいの配分であろう。食事作り、会場設定、ウォーク誘導などのボランティア費、お話などの謝礼など、人件費は会のほうで補助している。100 人一度ではなく、三々五々で少しづつ人が訪れる体制になると、次第にこれらの問題はなくなってくると予測している。



⑦ フットパス・拠点を整備する

イギリスのフットパスは、まず車でそのまちのビジターセンターに行き、その駐車場（と言っても舗装されているわけではなく草の生えた広場のようなところ）に車を置いて、半日から 1 日そのまちのフットパスを歩くのである。そして B & B などに宿泊して、次の日にまた隣のまちのフットパスを歩くために移動するのである。ビジターセンターでは、フットパス・マップのほかに、役に立ちそうな資料を頒布しているので、ビジターセンターは歩く人のためにはなくてはならない拠点である。

また、地元の方々もビジターセンターに産物を置いたり、ちょっとした食べ物を提供したり、そして地元の人々自身の集会所になったり、コンビニもないところなどでは生活必需品を置いたり、できれば宿泊も可能になるなど、フットパス拠点は大事なポイントとなる。

小野路の場合には、元、宿場のあった小野路宿の入り口にある名主屋敷「角屋」を町田市が買い取って、地元の意見を取り入れながら 5 年後にまちづくりの拠点として再生することになっている。

第三段階

ここからが大事な段階である。フットパスはただ歩くこととは違うのは、この段階に到達するために重要な役割を果たすからである。地元が環境型のまちづくりを実行できるような経済社会状況を整備することがフットパスの使命である。

⑧ その地域の活性化の方向を考える-農業と商業

フットパス・ウォークを行って、自分の郷土をよく見直し、外部からの意見に耳を傾けていると次第に、その土地の問題点が明確に浮き出てくる。また、行政と市民の間に共通の認識や活力が育ち、問題を克服するための 1 歩 1 歩を実際の行動にうつすことができるようになる。このとき観光のほうに走るのではなく、根本的な解決に繋がるように、特に農業や商業の建て直しができるように考える。

小野路の課題の 1 つは小野路を訪れる人に提供できる産品を生産販売できる場所とシステムを整備すること、2 つは里山の谷戸の景観を保全するために、谷戸田を活かした伝統的な農業を再興し活性化することである。農業を手伝ってみてわかったことは、農産物で流通をするほど販売を拡大することは、機械化や農薬化を伴わなければならない、安全を求める現代の消費者のニーズには結局合わないということである。伝統農業は都市住民にとって数学的な刺激もあり景観も守れるが農業従事者の人件費が出ないのが問題である。最近では小野路に住み込んで農業をしたいという人も多いため、都市住民を里山に導入し農家に講師料を払って都市住民に伝統農業を教えてもらい、地域的な生産と地産地消のサイクルを作ってみたいと考えている。

⑨ 担当者を募集する

ご自分の地域や村でやる気のある人が存在する場合や、たいていフットパスをやろうとするような地域は活力のある市民や行政職員が育っているの、その中で幾人かのリーダーが出てくると思われるが、限界集落のようなところで若い人がいないようなところでは、都市から公募すれば、喜んでくる人が多いと思われる。リーダー養成は、「日本フットパス協会」でも、全国研修を行ったり地域に赴き支援を行うことができる。

⑩ 都市住民の導入計画を立てる

モデルが成功したら、少しずつ都市住民の数を増やし、できれば市が仲介となって景観のいいところに景観法や条例などに則って住居を計画的にたてたりしながら導入計画を進めていく。

小野路は今年から「農業塾」を開催する。伝統農業をしっかりと行ってきた専業農家を講師として、都市住民や若い人に講師の持つ遊休地などを利用して農業を勉強してもらう。講師料、または入村料として、月 2000 円で 1 年間の契約を今のところ考えている。1 人の講師に生徒 10 人で、作物は、小麦、大豆、ゴマ、ジャガイモ、米など。大豆は収穫した後、味噌作りなども行う。ちょうど今経済が悪化しているので、将来に不安を持つ市民が将来の対策として農業を考える人も少なくないと思われる。実際、農業を学んだ後は小野路の中に土地を分けてもらって老後を住み着きたいという人が出てきている。食の安全や自給率のことを考えると、日本人全体が多かれ少なかれ農業に手を染めながら生活をしながらはなくなる時期もそう遠くないと思われる。

⑪ 地産地消の生活圈を作る—都市住民や若い人を巻き込んで高自給率の経済圏を作る

フットパスによって地域に訪れた都市住民や若い人が村に住めるようになるために農業を再興し、地産地消のまちづくりをすすめることを考えている。また、このような都市住民が都市に戻ることなく、その地域を愛していかれるように、近隣の中都市を都市住民や地元の方々が東京などにいかずとも文化的な催しや教養を得られるような都市に再開発する。都市からの大企業を呼び込んだり、地元の中小企業を都市的な産業に巻き込む。従来のは違った成熟した環境型中都市が全国に広がることとなる。これこそが、フットパス活動が目標とする日本社会の底上げに繋がると思われる。

○ 日本フットパス協会の役割

フットパスの効果を確信する町田市、長井市、甲州市、黒松内町の 3 市 1 町は 2007 年 11 月、「日本フットパス協会」を設立するために設立準備会を立ち上げた。そして 2009 年 2 月に設立を迎えようとしている。この協会がどのような協会なのか、何をしようとしているのか、をご紹介しておこう。

- お金儲けのための団体ではない

まず、最初にお断りしておきたいのは、この協会は何か特権を保有してそれを切り売りするような団体ではない。そのような必要がないからである。環境団体は福祉団体のように活動が資金源とはならないので、資金を得るために、ISOのような環境ライセンスや資格検定を販売する団体も多いが、この協会はそのような団体ではない。

「日本フットパス協会」では私たちが得たノウハウ及び人材をパッケージとして送り出すことを最大の機能と考えているが、そのための、ノウハウ料やライセンス料のようなものは取らない。できる限り多くの地域に私たちが得たノウハウをお伝えし、それを活かして日本全国が隅々まで活性化していただくことが目的であるからである。あちこちの自治体で活性化が進み、連携していけば、そこに人のフロウができ、経済のフロウができ、自然に資金作りの種は多々できると考えられる。

➤ 会費

これが問題である。自治体は年会費が5万円であるが、最初まだフットパスの効果が海のものとも山のものともわからないうちに5万円を払うというのは難しいと思われる。何とか効果を実感できるまで試験的期間というのが認められると無理がないと思っているが、しかし支払っている自治体もある以上、その線引きが難しい。効果がわかれば5万円は惜しくない金額であるが、どのように気軽に参加していただけるかということを考える必要がある。

➤ フットパスによるまちづくりのノウハウ及び人材を提供

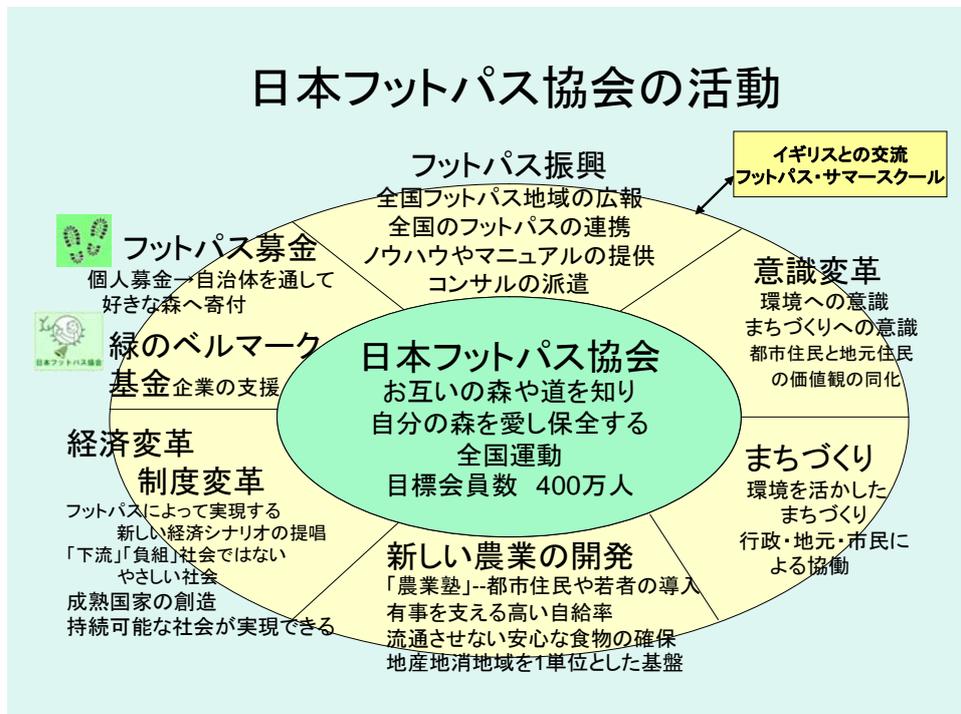
「日本フットパス協会」は、フットパスの整備をしたり、道標や道の基準化を図ったり、自治体間の連携を図るのが、第一義的な仕事ではない。それを目標とすれば、本当の連携は得られない。形式的に連携を図ろうと試みて失敗する例は枚挙に暇がない。日本フットパス協会の第一の使命は、フットパスのまちづくりのノウハウやプロジェクトの進め方の手順などをご希望の自治体にお伝えすることである。フットパスを作ることはなるべく自然を活かし、箱物も作らないほうがよく、地元の協力も得やすいので、費用がかからず、協働体制が取りやすく、まちづくりへの熱い情熱が人から人へ伝えられるので、どんな地域でも手軽に始められて成功率の高い手法である。日本の各地でフットパスによる活性化が起きてくれば自然に連携も図れるのである。

➤ 「日本フットパス協会」の活動内容

したがって「日本フットパス協会」の活動内容は以下のようになる。

- ① 各地のフットパスの成功例を集めてノウハウを構築する。
- ② 成功例を広報する
- ③ ノウハウを資料などにして希望の自治体に伝達する
- ④ フットパスはセンスが鍵なのでそのコンサルができる人材を送る

- ⑤ 各地のリーダー養成の研修を組む
- ⑥ フットパスを実施している各地を視察し交流する機会をつくる。本場英国にも研修に行く
- ⑦ 各地をつなぐ周遊コースを作り企業に販売してもらう
- ⑧ 各地を繋ぐフットパスの整備や道標などの基準化を行い、フットパスをめぐりやすくする
- ⑨ フットパスの各地周遊に付随する施設、おもてなしのシステムを作り、運営する。もしくは企業に運営してもらう。
- ⑩ フットパスまちづくりによって派生する農業や商業開発のモデル作りを行い、ノウハウを伝える
- ⑪ 各地の農業やまちづくりに都市住民を参加させる
- ⑫ 各地に住み着いた都市住民が楽しめるような地方都市を再開発し、企業の活性化を図る
- ⑬ 英国ナショナルトラストのように実際に緑地を購入して担保するような資産力を持つように基金や募金体制を整備する



➤ ネットワーク組織—会員は対等、リーダーは世話人

「日本フットパス協会」は自治体間連携を目指すネットワーク組織である。私が大学院の時代は金子郁容氏などのネットワーク社会論が盛んで、で新しい時代のネットワーク型組織はどのようにすれば成功するのかを学んだ。

それによると既存の組織を1つの大きな組織にまとめるのは大変難しいということである。従来の概念の枠で出来上がった組織をそのまま連携させるのは難しい。新しい概念のもとに、現在活発に活動している構成員に参加してもらって、1人1人が対等な立場に立つ

て交流をすることが、ネットワークのシステムを支える基本である。そして、ネットワークのリーダーとしては、ボス型ではなく、皆の間を取り持つ世話人型のタイプでないと、その組織は成長しない。

「日本フットパス協会」準備会の面々を見てみると、この意味で期待がもてる。長井市、甲州市、黒松内町、町田市と、それぞれがフットパスの経験者で非常に活発に活動している。行政を支える市民活動も盛んで自治体全体に意思の統一が取れているので勢いもあり達成度が高い。黒松内町 3 千人、長井市 3 万人、甲州市 3 万 7 千人、町田市 41 万人と人口の大きさには差があるが、準備会ではそんなことは関係なく 1 つの自治体の代表として皆誇りを持って対等に発言を行っている。協議を何度か行っているうちに友人として打ち解け、ネットワーク型組織のいい連帯感が生まれている。

現在準備会、発起人会のリーダーとなっている町田市は温厚なおとなしい自治体なので、世話人にはうってつけと考えられる。長井市の浅野さんは「町田ではいつも暖かく受け入れてくださる」とおっしゃってくださった。黒松内の新川さんや小畠さんが見えたときにも「友達」として暖かいお付き合いがあったようだった。日経新聞の岩崎さんも「町田のような自治体がやるということが意味がある」とのご意見だったし、経団連も「町田市にがんばってほしい」と言ってくださったとのことである。町田は今回の過程で他の自治体や国などとの交流を持ついい勉強をし、新たな自信を得たように思える。「日本フットパス協会」の会長は担当自治体で持ち回りとなるようだが、その都度、優しくて実力のあるリーダーが育つことを願っている。

➤ 自分の地域を自慢できる会

「日本フットパス協会」のもう 1 つの特徴は、メンバーが自分の自治体や地域のことを誰にも遠慮することなく一番いいところだと堂々と自慢し合っていることである。それが協会の目的なのである。自分の地域、自分の森を一番いいところだ、美しいところだと思ふ自治体や人々が、そのいいところをアピールして、お互いに訪ね合うことである。その土地の人間が自慢できないようなところでいいところなどありはしない。二本中の自治体や住民が自分の地域を誇りに思うようになれば、それだけで日本の底力は上がってくるであろう。

➤ 資産を持つ組織

「日本フットパス協会」は英国ナショナルトラストのように、資産を持つことが目標である。フットパスは危機に瀕している景観を救うことが必要であるし、地主さんたちや地元が潤うことが重要なポイントなのでこのための経済的手段も作らなければならない。ナショナルトラストは会員数 400 万人、年会費 40 ポンド（約 9000 円）と莫大な組織であり、会費だけでも土地の購入は可能である。このほかに、トラストの現場でのレストランやショップ、宿の経営、貴族など地主からの寄付など収入の間口は広い。

日本の場合にはイギリスの貴族のように自分の土地を寄付するなどということは難しいと思われる。そこで市民からのフットパス募金（残したい緑地を購入するために、フッ



ナショナルトラストは、売店、レストラン、マナーハウスなどの所有物から利益をあげる

トパス＝足跡が入る 30cm 平米の土地購入分として 2000 円を募金していただく) と、企業の協力による緑のベルマーク基金 (朝日のベルマークと同じ手法) の設立を考えている。

協会が自治体を主体に構成されているのも、自治体ならば、緑の購入に国からの補助金制度があったり、起債による計画的な購入が可能であったり、物納の制度を活かした緑地の担保の仕方があったり、民間よりもはるかに効率よく緑が獲得できるからである。



30cm×30cm 2000 円の募金を貴方の好きな森へ寄付：協会が仲介

● あとがき

フットパスと一口に言ってもこの言葉に含まれる奥深い意味がなかなか伝わらない。そこでこれまで「みどりのゆび」として取り組んできたフットパスの概念を本にしたらどうかというご提案を町田市からいただいた。2月の「日本フットパス協会」設立シンポジウムに間に合うようにとのことで、受験生を持つ母親業、老親と一緒に主婦業と、ほとんど2ヶ月しか時間がなく、本としてまではいかないけれど、リーフレットとして私達がお伝えしたかったことをまとめてみた。

これまでこのリーフレットを読んでいた皆様には心から感謝申し上げたいが、皆様にお伝えしたかったのは、今の日本はまだまだ決して悲観的ではなく、フットパスというメガネをかけると非常に身近なところに希望の種がいくつもあることがわかり、それを自分たちで育てていくことができ、しっかり根付いた立派な日本を子供たちに残してやれることである。ほかにもいろいろな方法論があると思われるが、とにかくお金もかからず失敗もなく、新住民も旧住民も共に心から楽しみながら手軽に始められるまちづくりということでフットパスはお勧めである。

私は地方自治が好きだ。父も叔父も旧自治省であったので門前の小僧よろしく地方自治が体に染み付いている。小さいときから父の転勤で全国の地方を巡り、地方行政の現場を肌で感じながら育った。父は三全総盛んなりし時代に仙台湾開発の企画や土木を手懸けた。1ヶ月のうちに父の顔を見る日はほとんどないほど毎晩遅くまで高度成長期の日本の勢いがあった。また東京に戻ると狭いアパートだったがよく、叔父を初め、後の武村正義滋賀県知事や小寺弘之群馬県知事など青年官僚の方々が我が家にいらして夜遅くまで地方自治の高き理想について熱く議論されていた。つまみを作る母の手伝いをしながら子供ごころにも何かわくわくしたものだ。大学では国連で仕事がしたいと国際関係の大学院に行ったが、やはり一番興味があるのは自分の地域や国の問題であることに気がついた。20年程前からひよんなことで緑という全く異分野の問題と出会うことになったが、結局それもまちづくりへの方向へと持ってきてしまった。まちづくりのことだと難しいことはわからなくともどちらに風が吹いていて今何をすればいいのかが見える。天職なのだと思う。

フットパスも15年ほど前から試行錯誤を繰り返し、地元で地道に活動して到達したもので、この経緯がイギリスのフットパスが草の根的に出現した経過に似ていると農大の麻生教授が教えてくださり、この活動をフットパスと名づけた。その後小野路で期待以上に成果があがったので、なんらかの方法で過疎化に悩んでいる村落にこの手法をお伝えすることができ、フットパス活動を行っている地域が連携することができれば、日本全体が活性化するに違いないと思った。この意味で「日本フットパス協会」の設立が、フットパスを熟知する3市1町によって実現された勇氣と行動力には本当に大きな期待がよせられるのである。

私の手前勝手な話にうんざりされた方も多いことであろう。しかし、フットパスを推進する者はこうなければ困るのである。どのフットパス自治体の担当者も他のまちのいいところを認めながら実は自分のまちを一番愛しており一番いいと思っている。こうでなければならぬ。フットパスとは自分の森を愛し、自分のまちを愛することである。住んでい

る人が自信をもてるようなまちが日本全国隅々まで広がればこれほど強い国家はないであろう。今日本の政権はかなりバキューム状態になっているが、誰が首相になろうとも、日本の各地で自分のまちを守る良識のある人々が構えていればどんな有事にも耐えられるであろう。武力や権力よりも皆が豊かに生活できる国になることこそが今一番求められているのだと思われる。

「日本フットパス協会」の設立を迎えるまで、普通では私などお目にかかることのできないような雲上の方々にご厚情をいただいたことを最後に心から感謝申し上げたい。なんといっても嬉しかったのはトヨタ自動車の豊田達郎様にお目にかかる稀有な機会を得たことがあって、さらにその上に、私のフットパスについての想いを述べさせていただくと「しっかりした考えですね、がんばってください」とおっしゃっていただいたことで、これを一生の宝としている。また「日本フットパス協会」の名誉会長を引き受けてくださった石原信雄様、今回のシンポジウムにご協力いただいた総務省の瀧野事務次官様、椎川地域力創造審議官、地域政策課の皆様、長井市のシンポジウムのご縁で暖かく応援してくださった野田様を初め国交省の皆様、多摩三浦丘陵シンポジウムのときから後援をいただいている農水省、環境省の皆様、この難しい企画を理解していただき環境基金を助成していただいた三井物産様、難しい内容をわかりやすく市民にお伝えくださったマスコミの皆様、心暖かな同志の2市1町のフットパスの皆様、「日本フットパス協会」を立ち上げようと言いだした張本人の篠田さん、「みどりのゆび」の看板となってくださった進士理事長、危なげなこまでの道を支えてくださった茶谷先生、安藤さん、鹿子木さん、など「みどりのゆび」の理事の皆様、15年以上に渡って陰日なたと一緒に行動してきてくださった尾留川さん、笠原さん、木田さん、を初め町田市役所の皆様、親戚以上のお付き合いの小野路の皆様、1つずつ礎の石を積んできてくださった事務局や会員の皆様、そしてここに載せられないほどの多くの皆様のご厚情は忘れがたく、感謝の念は尽きない。